

## さようなら天野紘一さん

若 月 剛

天野紘一教授は、2007年6月1日に64歳で神の元に帰られました。4月の英語英米文化学科1年生オリエンテーションの時には、「私は、この学科で最年長です」と自己紹介されて、お元気に新学期を迎えられました。ただ、後になって思い起こすと、4月の半ば過ぎからは顔色が悪く、食欲もあまりなかったようです。昼食をとりキャンパスの外に出かけたときにも、私は注文の品を平らげたのに、天野さんはほとんどを残され、お気に召さないところにお連れしたのではないかと心配したことがありました。それでも4月中は通常通りに出講され、いつものように研究室にお邪魔しては、昔の大学はもっと自由があったなどと、たわいのないことを語り合ったりしていました。

そうこうしているうちに、5月1日に、ご自宅近くの総合病院へ入院されたと聞いて、びっくりしました。それも、最初は検査のために訪れたのが、その日に病院で心肺停止になられたとのこと。急遽集中治療室に入れられて、医療処置のお陰で一命は取り留めたものの、丁度1ヶ月の間、ご家族以外には誰とも面会できずに旅立たれてしまいました。この1ヶ月の間、奥様が気丈に看護に当たられました。奥様から伺ったところでは、小康を得たときには、受け持たれていた学生のことを一番心配しておられたとのこと。そこで、担当されている授業はスタッフが手分けして代行することを奥様がお伝えすると、やっと安心されたとのことでした。

天野さんは、三河の出身で、時習館高校、静岡大学と進まれ、地元で幼年期、少年期さらには青年期を大いに満喫されたと、楽しそうに聞かせてくれたものでした。最終学歴は関西大学大学院文学研究科で、英文学を専攻・修了されました。ご専門は、古英語・古英詩で、1994年夏から1995年夏にかけての英国ケンブリッジ大学での1年間の客員研究員としての研修を終えられてからは、機会を作っては積極的に英国に出かけて、英国中の古い教会を訪れておられました。英国のさまざまなところに現在でも残っているローマ時代からの古い道路や遺跡を訪れては写真に収める研究活動も続けておられました。地名の中に残っている歴史の痕跡を尋ねることもなさっておられました。研究活動の一環として知り合いになった英国の一般の人たちとの交流も絶やさずに続けておられました。その後天野さんの紹介で私も英国ケンブリッジ大学での1年間の客員研究員として1997年夏から1998年夏にかけて英国に滞在することができました。その間に奥様やご子息を伴って立ち寄ってくださったときには、以前と同じようにレンタカーで英国国内をご自分で運転して走り回り、ついでに時計の骨董品を収集されたりもしておられました。

天野さんが金城学院に就職されたときには短期大学部の所属でした。彼と私が1ヶ月違いの同い年であることも手伝って、学部は違っていても大変親しくしていただきました。短期大学部当時は、彼の同郷の先輩である浅若佐教授の片腕となって、短期大学部英文科を盛り立てておられました。が、時代の流れに伴い、短期大学部が閉鎖されることになり、2002年4月に短期大学部から文学部英語英米文化学科へ移ってこられました。彼と私は文字通り最も近い同僚となったわけです。以前にも増して親しくさせていただくことになりました。

文学部に移られてからの5年間は、天野さんにとっては、忙しい毎日でした。移行当時は、短期大学部の後片付けもありました。文学部での新しい業務もこなさなければなりません。そろそろ還暦を迎えるというのに、

以前よりも忙しくなっていました。私的な場で、弱音とも聞こえることばを時には吐くこともありましたが、それも、彼にとっては自分を鼓舞するためのことばだったようです。教授会や学科会議の時には、私はほとんどいつも天野さんの隣に席を取っていました。彼が会議の開始時間前に着席して、私の分の席も確保しておいてくれたからです。日頃から物事を真剣に考えておられ、時には会議の席で、皆とは違う角度から問題を分析し、発言されました。

そのような中にあっても、天野さんは趣味の人でした。愛犬を可愛がり、目を細めてやんちゃ振りをご披露されました。余暇には木工工作を手がけられ、ご自宅の裏庭にすわり心地のよさそうなベンチを作り上げることもされました。葬儀が終わってしばらく経った日に、私ども夫婦で奥様をお見舞いにお宅を訪れたときに、彼の遺作であるベンチがコの字型に並んだ東屋風の一面を拝見させていただきました。それは、彼が自分で材木を調達し、設計から施工までを成し遂げたもので、素人の手によるものとは思えませんでした。裏庭全体も心地よく整備されていました。さらに彼は、達筆な人でした。走り書きのメモの字にもそれが現れていました。語り口は平易で、必要なときには喩えをうまく使い、誰にでも理解できるように話をされました。

天野紘一教授は、キリスト教文化研究所を立ち上げた有力メンバーの一人でした。当時は、現在ではすべて故人となられた、岩田淳二教授、安達壽孝教授、眞山光弥教授といった方々と協力しあって、本研究所の活動を進めてこられました。私も天野さんに誘われて、途中から参加させていただくようになりました。

天野さんの葬儀のとき、花束の中に、「娘たちより」との献花がありました。彼には二人の息子さんがおられるのは知っているがお嬢さんはいなかったはずだが、といぶかったのを思い出します。疑問は直ぐに解明しました。彼は学生たちの面倒をととてもよくみる、すばらしい先生だったので

す。教え子たちが「娘たちより」として献花をしたのです。彼は、学生に対してだけではなく、同僚、事務員、その他の方たちにも大変気さくに声をかけられました。たくさんの友人をもっておられました。私もその一人に入れてもらっていたわけですが、彼を通して彼の友人のことを教えてもらうこともよくありました。天野紘一さんの優しさは、交流のあったすべての人の心の中にいつまでも残っていくことでしょう。

私は、天野さんのご家族を始め、ご友人の方たちと同じように、彼の旅立ちを淋しく思っています。しかし彼には、今の休息が必要なのかもしれません。「どうぞゆっくりとお休み下さい。天野紘一さん」